

【論文】

G・オーウエルの政治思想

—オーウエルのスペイン内戦体験における光と影—

古賀敬太

目次

序

第一章 スペイン内戦体験における光

第二章 スペイン内戦体験における影

第三章 オーウエルの政治思想における光と影

“光は闇の中に輝いている。闇はこれに打ち勝たなかった”(聖書)

一九三六年七月に勃発したスペイン内戦は、スペイン内外の主要な作家達の関心を文字通り独占した、精神上稀にみる出来事であった。スペイン内戦は当初、共和国を支持する政治勢力と、フランコ將軍の反乱を支持する右翼の勢力との仮借なき闘争として展開した。共和国を支持するヨーロッパやアメリカの作家達は、この内戦を、民主主義対ファシズム、自由対抑圧の闘争として理解し、ファシズムに対して民主主義や自由を擁護する絶好の機会として迎えた。これに対して、フランコ將軍を中心とする反乱側を支持する人々、なかならずカトリックの作家達は、この内戦を、キリスト教対無神論的マルクス主義との闘争と考えた。彼らは、フランコの新国家の中に、共産主義の脅威が永久に根絶されるキリスト教社会の実現を期待したのである⁽¹⁾。

スペイン内戦にコミットした作家達の中では、フランコ側を支持するよりも、共和国側を支持する作家達が圧倒的に多かった。例えばA・マルロー、G・オーウェル、E・ヘミングウェイ、A・ケストラーなどは、内戦が勃発するとスペインを訪れ、共和国を支持する側に立って戦った。彼らが残した名著、『希望』(A・マルロー)、『カタロニア讃歌』(G・オーウェル)、『誰がために鐘は鳴る』(E・ヘミングウェイ)、『スペインの遺書』(A・ケストラー)は、スペイン内戦についての貴重な証言であると同時に、戦争文学における一大モニュメントをなしている。

彼らは、内戦勃発以前、頹廢しつつある西洋文明を鋭く批判していた。F・R・ベンソンが指摘する様に、彼らは活力を喪失し、閉塞状態に陥っていた文明社会から逃れて、スペインにおいて新しく、より良い社会秩序を創出するために闘うことを決意した人々であった。しかし彼らの多くは内戦の過程で、人民戦線の内部分裂や共産党による反対派の弾圧や粛清を目撃して、次第にスペイン内戦に幻滅していったのである。

本稿ではケース・スタディとしてG・オールウェルをとり挙げて、スペイン内戦がオールウェルの政治思想にいかなるインパクトを与えたか、その光と影の両面から考察することにする。更にスペイン内戦に触発されて、その後のオールウェルの思想がいかなる展開をとげたかも、あわせて検討することにしよう。

第一章 スペイン内戦体験における光

G・オールウェルのスペイン内戦体験の内実に立ち入る前に、彼がスペイン内戦に参加し戦った経緯を簡単に紹介しておくことにする。

スペイン内戦は、共和国に対するフランコ側の反乱により、一九三六年七月に勃発した。G・オールウェルは、一九三六年一月、「ファシズムと戦うため」、「人間共通の品位(common decency)のため」スペインに赴き、バルセロナでPOUM(マルクス主義統一労働者党)の民兵隊に参加した。彼がアナーキストの勢力の強いカタロニアやアラゴン地方を主な活動の舞台としたこと、また彼が共産党系の国際旅団の民兵隊ではなく、アナーキスト系で反スターリン主義を信奉するPOUMに参加したことは、彼のスペイン内戦体験に彼独特の刻印を帯びさせる結果となった。この選択がなければ、オールウェルのスペイン内戦体験、そしてその後の彼の思想と行動は、異なったものになっていたことだろう。

オールウェルがスペイン内戦に関わった時期は、ほぼ二分される。第一期は、オールウェルがPOUM民兵隊に入隊し、一九三七年一月初旬から四月二五日までアラゴン地方のサラゴサ前線で塹壕戦を戦い、四月二六日休暇でバルセロナに戻るまでの約五カ月の期間である。第二期はオールウェルがバルセロナに戻って後、アナーキストと共産主義者との

市街戦、並びに共産党によるPOUMの弾圧を経験し、六月二三日夫人と共にフランスに逃亡する約二ヶ月の期間である。光と影という観点から見ると、第一期がオーウエルのスペイン内戦体験の光の部分に該当し、第二期が影の部分にあたるといえよう。

本章では、『カタロニア讃歌』を中心とし、彼の書簡などを交えながら、彼の体験の光の部分を抽出し、それが彼の政治思想にいかなる衝撃を与えたかを検討することにする。

オーウエルは、一九三七年六月八日シリル・コナニー宛の書簡の中で、スペイン内戦体験に関して次の様に述懐している。

「私はいろいろすばらしいものを見て、以前には社会主義を決して信じなかったのですが、ついに本当にそれを信じるようになりました。」（傍点筆者）

またオーウエルは、一九三七年一〇月九日における『タイム・アンド・タイド』誌上に掲載された書評の中で、以下の様に語っている。

「人々が革命を信じていた数カ月の間にスペインにいた者はだれでも、あの不思議な感動的な体験を忘れることはできないであろう。それはいかなる独裁も、たとえフランコのものでも、ぬぐいさることのできない何かを残したのである。」（傍点筆者）

ここで注目に価することは、オーウエルがシリル・コナニーに宛てて書いた書簡の時期、また『タイム・アンド・タイド』誌上に掲載した書評の時期が共に、オーウエルがすでにスペイン内戦における影の部分を経験し、幻滅を味わった後のことであったという事実である。この事実、彼のスペイン内戦に対する深い幻滅にもかかわらず、彼の

感動的な体験が決して消え去ることがなかったことを立証している。『カタロニア讃歌』の最終章におけるオールウェルの以下の記述は、そのことを裏書きしているように思われる。

「あのような悲惨な有様をちらとでも見たからといって——そしてどのような結末に終わろうと、スペイン内戦は、殺戮や肉体的苦痛は別としても、結局恐るべき災難であったということにつきるのだが——その結果が必ずしも幻滅や冷笑であるとはかぎらないのだ。あのような体験のすべてが、私の人間の品位 (decency of human beings) に対する信額の念を弱めるどころか、いっそう強めてくれたのだ⁽⁵⁰⁾。」

それでは一体全体、オールウェルにとって、「いろいろすばらしいもの」、「あの不思議な感動的体験」とは何であったのだろうか。私達は、第一にバルセロナでの体験、第二に義勇軍の中での体験、第三にイタリア人兵士との邂逅という三つの出来事を通して、オールウェルの感動的な体験の内実に迫ることにする。

第一にオールウェルは、アナーキスト達の支配するバルセロナの光景を目撃して、衝撃を受けた。

「イギリスからまっすぐにやって来た者にとっては、そのころのバルセロナの様相には、何かびっくりするような、圧倒されるものがあつたのだ。労働者階級が支配者となっている町にいたつたのは、それが初めてであった。……食堂の給仕も商店の売り子も、お客の顔をまともに見て、対等の応対をした。……みんなお互いに『同志 (comrade)』とか『君』とか呼びあつた。……しかしとりわけ奇妙だったのは、町で見かける一般的民衆の様子だった。……ほとんどすべての人が、粗末な労働者階級用の洋服か、義勇軍の制服の青い上っぱりか、その制服まがいのものを身につけていた。こうしたことは、どれもこれも奇妙で、しかも感動的だった⁽⁵¹⁾。」

オールウェルはこのバルセロナの町で、一時的にはあるが階級の区別が消滅し、皆が社会的・経済的に平等な立場

で生活している様を感動を以って体験したのである。

次にオーウェルは、バルセロナの町に続く第二の感動的な光景を、アラゴン戦線で戦う義勇軍の中に見い出した。

「この義勇軍組織の肝心な点は、将校と兵士との間が社会的に平等である、ということだった。將軍から一兵卒にいたるまで、全員が、まったく同じ給与を受け、まったく同じ食事をとり、まったく同じ服を着、まったく同等の立場でつきあった。……少なくとも理論的には各義勇軍とも、階級制ではなく民主制のうえに立っていた。……

……義勇軍の間に一時的であつてもよいから、階級のない社会の生きたモデル、といったものを作ってみよう、という意図が働いていたのだ。もちろん完全な平等とはいえなかったが、それでも、私がこれまで見たこともないほど、あるいは、とても戦時中とは受けとられないほど、完全な平等に近いものだった^(?)。」

このようにオーウェルは、バルセロナや義勇軍における光景を目撃して、イギリスでは絶対に味い知ることのできなかった「階級のない社会」の生きたモデルを体験した。それは、経済的な貧富の差や政治的な支配関係が共に消滅するのみならず、精神的にもお互いに「同志」として何の隔たりもなく交わることができるような世界であった。オーウェルにとってこのような世界は、「地上の楽園」に等しいものであった。オーウェルはこのような「地上の楽園」を、スペインに来る以前から探し求めていた。すでに彼は、スペインに来る前に執筆した『ウィガン波止場への道』の中で、「人間が人間を支配するあらゆる形態」から逃げ出したいという強い欲求に圧倒される、と語っていた。また彼は同書の中で、人々が階級間の障壁を乗り越えて連帯しうるためには、正義、自由、人間に共通する品位（common decency）が是非とも必要であると述べていた⁽⁸⁾。オーウェルは、これらすべてが実現されていると思えるような世界に身をもって接し、コナー宛の書簡の中で吐露していた様に、社会主義を信じるようになったのである。

この点に関し、A・ツヴァードリは、『オーウェルと社会主義』の中で次の様に評している。

「スペインに行く以前には、階級のない社会とか、支配、隷属の全体系の根絶というような理想は、彼にとって具体的現実性をもたず、恐らくは実現の望みの全くないヴィジョンにすぎないもののようにしか思えなかった。今やそのような世界が本当に実現できるのだという新しい確信が生まれ、それが彼の社会主義への献身を決定することになった⁽⁹⁾。」

オーウェルにとって社会主義は、経済的な不平等がなく、政治的な支配関係が存在しないという意味での経済的・政治的概念のみならず、それより遙かにまさって精神的・道徳的概念であった。誤解を恐れることなく言えば前者は後者が最大限に実現されるための手段としての意味を持っていると言えよう。彼が単に政治的・経済的な枠組よりも、その枠組の中に息ずいている精神的基盤をいかに重視したかは、ハンフリ・ハウスに宛てた書簡の中に如実に示されている。彼はその中で、「政治や経済上の形式がどうであろうと、人間社会の根底には、共通の道義心がなければならぬ⁽¹⁰⁾」ことを指摘した。オーウェルの理解する社会主義を考察する上で鍵となる言葉は、すでに本稿でも何度となく登場してきた「人間に共通する品位」(common decency)という概念である⁽¹¹⁾。このキー概念についての解釈の中で、R・ホガートの定義は極めて示唆的である。彼は、「人間に共通する品位」を解して、「同胞愛と思いやりのある振舞という考えに、行為の上でコミットすることを意味していた⁽¹²⁾」と述べている。彼のdecentの概念、つまり同胞愛や連帯、思いやりといった精神的な価値が社会主義にとっていかに不可欠であるかは、彼がO・ワイルドの著作に対する批評で述べたことの中にはっきりと認められる。つまり、彼は、O・ワイルドのユートピア的でアナキズム的な社会主義のヴィジョンが、「人間的友愛⁽¹³⁾という半ば忘れられている本来の目標を社会主義運動に想起させ

る⁽¹³⁾」と評価したのである。

この「人間的友愛」をオーウェルが最も切実に体験したのは、彼のスペインにおける第三の体験、つまりイタリア人の一兵士との邂逅を通じてであった。彼は『カタロニア讃歌』の冒頭部分でこの邂逅を感動的に書き記している。

「私達が部屋を出る時、彼は部屋の向かい側からつかつかと歩いて来て、私の手をいきなりぎゅっと握りしめた。初めて会った人にこんな愛情を感じるなんて不思議なことである。それこそまるで、彼の魂と私の魂が一瞬、言葉や伝統の障壁を飛び越えてぶつかり合い、ぴったりと一つにとけあったみたいだった⁽¹⁴⁾。」

この魂と魂との触れ合い、融合の経験こそ、オーウェルが終始一貫して追求していたものであり、オーウェルの社会主義観の中心をなす友愛や連帯を象徴的に示す出来事であった。オーウェルはよほどこのイタリア人兵士との邂逅に感銘を受けたのか、「スペイン戦争回顧」においてもそのことに触れている。その記述によれば、オーウェルにとつてこのイタリア人兵士は、オーウェルが深し求めていたdecentな人間の典型として映じた⁽¹⁵⁾。彼は権力、政治、偽善、嘘八百、そして暴虐や人間性の破壊が横行する中で、それらによって魂を汚されることなく、人間らしさや思いやりを失うことはなかった、「水晶の精神」を持った人であった。

「……僕が君の顔に見たものは、いかなる権力も奪うことはできない。いかなる爆弾も砕くことはできない水晶の精神である⁽¹⁶⁾」

すでに触れた様に、オーウェルは、恐るべき人間性の破壊や暴虐を生みだしたスペイン内戦における体験のすべてが、「人間の品位(decency)に対する信頼の念を弱めるどころが、いっそう強めてくれた」と語っていた。このオーウェルの注目すべき単なる発言は、単なる負け惜しみから出たものではなく、イタリア人兵士との出会いを初めとする幾

つかの体験によって裏打ちされていたのである⁽¹⁷⁾。

ここで看過してはならないことは、彼が社会主義の目標とみなし、イタリア人兵士との邂逅で体験した友愛や連帯は、オールウェルが生まれ育ったイギリスに典型的に示されているような頹廢した西洋文明に対する痛烈なアンチテーゼを意味していたことである。彼は、金銭、利害、打算によって動機づけられる人間関係を清算し、一切の虚飾を廃して魂と魂が全的に触れ合うような「共同体」を求め続けた。この点において『カタロニア讃歌』における、「社会主義が支配的な精神的雰囲気」を醸し出しているアラゴン地方と、「金銭に汚れたイギリスの雰囲気」との比較対照は、極めて、示唆的である。彼はイギリスとの比較を念頭に置きながら、アラゴン地方の様子を次の様に伝えている。

「文明生活のごく普通の原動力——つまり俗物根性とか、金儲けあさりとか、上役に対する恐れなど——は、たいてい全く消滅している。……無気力や冷笑よりも、希望のほうがかもつとまともであり、『同志』という言葉がたいていの国々の様にインチキの同義語ではなくて、同志愛(commoradeship)を意味するような社会にいたのだ⁽¹⁸⁾。」

フランス革命の遺産である自由、平等、博愛の精神は、オールウェルの心の中に生き続けていた。その意味において彼は、一九世紀の市民的世界の継承者であり、ヒューマニストであった。オールウェルにとって自由・平等・博愛は三位一体をなしており、彼の強調する友愛も、個人の自由と平等を土台にして初めて実現可能であった。ただ社会主義者オールウェルの場合、平等の概念が経済上の平等はもとより、政治的な支配関係の廃棄という点にまで押し進められているのが特徴的である。オールウェルにとって人と人との全的な結びつき、つまり友愛は、階級の区別や貧富の差、並びに政治的な上下関係が清算されることによって初めて実現可能であった。総じてオールウェルは、一九世紀のヒューマニズムや自由主義の土台の上に、彼のアナキスティックな社会主義概念を構築しようと試みたといえよう⁽¹⁹⁾。人

間の自由や友愛をことごとく踏みにじり、それらを隷属と虚偽と不信に変え、階級的な不平等に変えて新たなエリート
トの支配を産みだすような非人間的社会主義は、全く彼の想像の及ばぬ所であった。しかし彼は、この非人間的社会
主義の原型を、よりにもよってスペインにおいて体験することとなった。この体験こそ、オーウエルのスペイン内戦
体験の影の部分に他ならない。

第二章 スペイン内戦体験における光

一九三七年四月バルセロナに戻ったオーウエルは、町の様子が一変していることに気付き、一瞬驚きを禁じえなかつた。彼は革命以前の階級差別の状態に逆戻りしたバルセロナについて以下の様に述べている。

「どこへ行っても、でっぴり太った金持ちらしい男達や、優雅な婦人達、それにびかびかした自動車が目についた。……金持ちと貧乏人達、上層階級と下層階級といった社会のふつうの分化がよみがえりつつあった⁽²⁰⁾」

また軍隊においても、義勇軍に代わって人民軍が成立し、ここでは「給与と制服の違いによって表わされるはつきりした社会的相違があった。⁽²¹⁾」

このように、階級なき社会のモデルを目撃したオーウエルは、すぐにそれが死滅する様をも目撃した。そして一層
オーウエルを幻滅させたものは、ファシズムと戦うために今まで人民戦線を組んできたアナーキストと共産主義者同
士の市街戦であり、共産主義者によって事実上牛耳られた共和国政府によるP O U Mの弾圧であった。オーウエルは、
これらの事実を通して、共産主義のスターリニズムの恐怖政治の一齣を垣間見たのである。彼はこの時の体験を、ス
ペインから逃がれて約二ヶ月後に執筆したジェフリ・ゴフラー宛ての書簡の中で以下の様に述べている。

「スペインで起こっていることの恐しさは、あなたには想像できないと思います。ファシズムを食い止めるというのを口実にして、ファシズムが押しつけられ、また文字通り何百人という数の人が投獄され、裁判もされずに何ヶ月も監獄に放り込まれたままであるし、新聞は発行禁止にされたりで、まさに恐怖政治です⁽²²⁾」

また彼は同様の趣旨の事を、一九三七年の七月と九月の『ニュー・イングリッシュ・ウィークリー』誌上に掲載した「スペインの内幕をあばく」で以下の様に述べている。

「しかし、政府が自派の革命家を粉砕しているその徹底さには、少しも疑う余地がない。ここしばらくの間、恐怖政治——諸党派の強力な抑圧、新聞の息を止めてしまうような検閲、たえまなく展開されているスパイ行為や裁判なしで行なわれている集団投獄——が進められている⁽²³⁾」

特にオールウェルが憤慨したことは、共産主義者によって歴史的事実が彼らに都合の良い様に歪曲され、虚偽があたかも真実であるかのように信じ込まされていることであった。特にファシストに対して前戦で勇敢に戦ったPOUMが共産党によって「裏切者」、「ファシストの共謀者」「スパイ」、「トロッキスト」などとあらぬ烙印を押されて、POUM関係者が大量に弾圧・投獄されたことは、その典型的な例であった。後年オールウェルは、バルセロナでのPOUMの弾圧を振り返って、「こういう事態がそろ恐しく思えたのも、客観的事実という概念そのものがこの世から消えてなくなってしまうのではないかと感じられたからである。そうなる歴史も嘘で塗り固められてしまうことになる⁽²⁴⁾」と記している。権力者がしかじかの事件について、「そんなことはなかった」といえばそうなり、2+2=5といえれば無批判にそのように信じられる虚偽の世界は、オールウェルにとって、人間の自由や創造的精神をことごとく死滅させてしまうように思われた。そうなればオールウェルが終生求め続けたdecentな生活は跡かたもなくこの地上から

姿を消してしまうであろう。かくしてオーウェルは、自己の全存在を賭けて、彼がバルセロナで体験したスターリニズムの恐怖政治に対して抵抗するために立ち上がったのである。戦いの重点が、ファシズムに対する闘争から、スターリニズムに対する闘争へと移行した。P・ルイスは、スペインからの帰国後のオーウェルの使命が、POUMの彼の友人達の汚名をそそぎ、「でっちあげをおこなったスターリスト達の冷酷さの正体を暴くこと」⁽²⁵⁾にあったと論じている。事実、『カタロニア讃歌』もその目的のために書かれたのである。彼はスペイン内戦に触発されて、その後ロシアの共産主義やスターリニズムを想定して『動物農場』（一九四五年）や『一九八四年』（一九四九年）を執筆し、彼にとって「地上の地獄」と映じた全体主義支配のからくりを容赦なく解剖し、痛烈な批判を遂行した。オーウェルにとって、バルセロナでの体験から『動物農場』や『一九八四年』までの道は一直線に通じていたのである。この点に関してオーウェルは、次の様に述べている。

「一九三六年以来、私「オーウェル」が本気で書いた作品は、どの一行も、直接あるいは間接的に、全体主義に反対して書いたものであり、私が理解する流儀での民主的社会主義のために書いたものである⁽²⁶⁾。」

ところでオーウェルにとって全体主義のモデルとなっているロシア的共産主義は、彼のアナキズム的色彩の濃い「階級なき社会」という社会主義観とは全く対蹠的であった。彼は『カタロニア讃歌』の中で、「共産主義者は常に中央集権主義と能率を強調する。それに対してアナキストの力点は、自由と平等に置かれている⁽²⁷⁾」と両者の相違点を比較している。「捕虜収容所と秘密警察」と同義語となった共産主義とは全く対照的に、オーウェルの想定する社会主義は個人の自由と平等を基調とし、経済的・政治的中央集権化を徹底的に排除するものであった。なかならず後者においては個人の自由が踏みにじられ、人と人との間に不信と虚偽と恐怖が支配しているのに対し、前者において

は自由と友愛が存在し、品位ある (decent) 生活が可能となる。オーウェルにとって前者が「地上の天国」であるユーロピアであるとするならば、後者は「地上の地獄」である反ユーロピアであった。オーウェルは、「心情的には……無邪気なアナキスト」(ドイッチャー)であり、彼の社会主義は、「マルクスのものよりはるかにプルドンのものに近かった⁽²⁸⁾」(G・ウッドコック)といえる。事実私達は、オーウェルの共産主義的な全体主義に対する批判の中に、アナキストのバクーニンがマルクス主義的な国家観を批判して述べたすべてのことがそっくりそのまま再現されているのを見るであろう。周知の様にバクーニンは、「自由の名において……国家社会主義と国家共産主義とに幾分とも類似する一切のものに常に反対する」と述べ、「社会主義なき自由は特権であり不正であるが、他方自由なき社会主義は隷従であり、野獣性である」と断じた。バクーニンはマルクスとの論争に際し、マルクスの共産主義を自由なき共産主義の体系とみなし、「権威主義的共産主義」として弾劾した。このようにアナキストの主要著作におけるほど共産主義の鋭利かつ根本的な反駁はどこにも見出しえない。オーウェルもまた心情的にアナキストであったが故に、彼の全体主義批判も根本的にならざるをえなかったのである。オーウェルの中にアナキスティックな「地上の天国」に対する強い愛着が漲っていたからこそ、彼の全体主義批判も先鋭化し激烈にならざるをえなかったといえる。

以上私達は、第一章と第二章において、オーウェルのスペイン内戦体験の光と影について検討してきた。そこから導き出される結論は、オーウェルにおいては光は闇の中にかき消されてしまうのではなく、闇の中においても輝き続けたということである。彼は闇が暴威を振う時代の中にあっても決して希望を失わなかった。次章で、スペイン内戦後のオーウェルの発言を跡づけることによって、そのことを検証することにする。

第三章 オーウェルの政治思想における光と影

オーウェルにとって、「社会主義は結局は楽観主義的な信条であり」、社会主義者は「『地上の楽園』が可能だと信じている人間」であった。しかしオーウェルは、彼の理想とするアナーキズム的社会主義が実際に実現されることを信じた楽観主義者ではなかった。たしかにオーウェルは、一時的にバルセロナでアナーキズム的社会主義が実現されるのを目撃したが、それはすぐに消滅してしまった。オーウェルは気質的に悲観主義者であり、スペイン内戦後は、社会主義の達成どころか、個人の自由・平等・博愛というフランス革命の遺産が全体主義体制によってトータルに否定されるのではないかという悪夢にとりつかれていた。この点に関しウッドコックは、「オーウェルは、自由とか平等とか、更には人間の品位とかいった倫理的概念が、なお大きな力をもっているこのような社会から消えうせる運命にあると考えた⁽²⁹⁾」と述べている。オーウェルは、H・ミラー論「鯨の腹の中で」(一九四〇年)において、「社会主義が自由主義の空気を保ち、さらに広げるであろう」という考えが間違いであることを指摘した後、現代の一般的傾向に関して次の様に述べた。

「ほぼ確実に我々は全体主義的独裁制の時代にはいついこうとしている。その時代にあっては、思想の自由はまず第一に死に値する罪であり、……自律的な個人はその存在を抹殺されるであろう。⁽³⁰⁾」

悲観主義者オーウェルは、このような時代の一般的傾向に目を覆い、全体主義の危険性を本気で考えようとしなないイギリス人の楽観主義に警告を発した。

「しかし、全体主義の未来凶におびえることは、子供じみた、あるいは病的なことだろうか。……我々イギリス人は、こうした種類の危険をみくびる傾向がある。それというのも、我国の伝統と過去の安泰によりかかっ

て、何事も最後にはうまく治まるものであり、一番恐れていることは実際には起らないものだ、という甘い信念を持っているからである。数百年来、最後の章ではきままって正義が勝つような文学にはぐくまれてきたおかげで、我々は半ば本能的に、悪は最後には自らの手で滅びるものと信じている。³¹⁾」

オーウェルが診断した時代は、正義が勝ち、悪が滅びるところか、逆に正義が踏みこまれ、虚偽と暴力が猛威を振っている時代であった。オーウェルは、「悲観主義の限界」(一九四六年)の中で、現代において「『主義として打ち出せるのは悲観主義ぐらいなものだ』と述べ、「『地上の王国』には永久に到達できない。自由を打ちたてようというあらゆる試みは、やがて専制とかず。……今は肯定的な態度をとればみなつまずいてしまうような時代である³²⁾』と概嘆していた。

そして彼の悲観主義は、『一九八四年』において頂点に達する。オーウェルにとって全体主義の本質的特徴は、それが人間の自由を制限するのみならず、人間の魂の内部にまでは入り込み、人間を党や国家に隷属するように完全に改造してしまうこと³³⁾にあった。オーウェルが『一九八四年』で描いた主人公は、全体主義体制に命を賭して抵抗する自由人ウィンストンではなく、拷問に屈し、完全に洗脳され、自分を告発したものを賛美するにいたるまで改造されたウィンストンであった。またジュリアとの愛を最後まで守ろうとする人道主義者ウィンストンではなく、平気でジュリアを裏切り、自己を守ろうとするエゴイストのウィンストンであった。私達はこのウィンストンという一人の男の中で、古き良き時代の諸価値——自由・平愛・博愛——が音をたてて崩れ落ちていくのを見るであろう。オーウェルがスペイン内戦で体験した影は、その後次第に広がり、『一九八四年』においてまさに地上を覆い尽くさんばかりになった。とするならばオーウェルは、人間と人類の将来に絶望したのだろうか。ここでも私達は、オーウェルのスペイン

内戦体験に立ち戻らなければならない。スペイン内戦は、深い幻滅にもかかわらず、オーウェルに、「人間の品位に對する信頼の念を弱めるどころか、いっそう強めてくれたのである。」オーウェルの脳裏には、常にあのイタリア人兵士の姿が焼きついて離れなかった。このように考えると、『一九八四年』を見る見方が変わってくる。『一九八四年』は、絶望の書ではなく、警告の書である。イスラエルの民のバビロン捕囚を預言し、民に悔い改めを促すエレミアの中に熱い愛国主義的心情が燃えたぎっていたように、悲観的な未来の診断を呈示し、警告を発するオーウェルの中は人間の品位や自由に對する強い信頼が漲っていた。この点に關し奥山氏は炯眼にも次の様に指摘している。

「オーウェルは、人間と人間の未来に絶望していたのだと私は決して思わない。『一九八四年』を書いてきた時のオーウェルは、『カタロニア讃歌』の中で義勇兵仲間のことを書いていた時と同じ様に、人間の愛は「いかなる爆弾も打ちくたくことができない」強さをもったものだと確信していた、と私は思う。……彼が文字通り心血を注ぎ、生命を賭して書いた『一九八四年』こそ自己愛を超えた彼の人間愛の強さを示す偉大なモニュメントであるということができよう⁽³⁴⁾。」

オーウェルは氣質的に悲観主義者であったものの、人間の品位のために戦い、全体主義の到来に對して警告を発した。彼はその意味において行動の人であった。彼はこの点において同じ悲観主義者であり、オーウェルの友人であったヘンリー・ミラーと頗る対照をなしている。

オーウェルは、一九三六年一二月スペイン内戦に参加する前に、当時パリにいたH・ミラーを訪ねた。ミラーはスペイン内戦に對して全然関心がなく、「スペインに行くのは愚者の行為であり、義務感から行くものは単純な馬鹿、民主主義の擁護などの一切の考えはたわごとである⁽³⁵⁾。」と主張した。ミラーにとって、近代西洋文明の崩壊は人間の

力によっては阻止しえない不可避なものであった。これに対してオーウェルは、全体主義に対して人間の自由や品位を擁護するために戦うことを主張したのである。オーウェルはミュラー論「鯨の腹のなかで」で、ミュラーについて次の様に論証している。

「彼は、『革命的』作家たちの大多教よりもはるかにしっかりと西洋文明のやがてきたるべき没落を信じていると私は思う。ただ彼はそれについて何かする義務を感じないだけだ。彼は、ローマが燃えている時にヴァイオリンをひいているのだ。しかしこんなことをする連中の多くと違って、自分の顔を炎に向けてひいているのである。⁽³⁶⁾」

オーウェルはミュラーの偉大さを認めつつも、結局彼を、「完全に否定的な、非建設的な非道德的な作家」であり、ヨナの様鯨の中にいて、文明の没落と悪の蔓延にもかかわらず一人平然としている受動的作家だ、と論じた。ミュラーに対してオーウェルは、人類の将来に対して悲観的な診断を下しつつも、能動的にそのような未来の到来を阻止しようとしたのである。彼は言う。

「私が描いたような種類の社会が必ず到来するとは思いませんが、それに似た社会が起りうると思うのです。……この本の舞台はイギリスにおかれています。これは英語国民も本来ほかの国民よりましなわけではないこと、また全体主義は、もしそれと闘わなければ、いかなる場所であれ、勝利をしめる可能性があることを強調するためです。⁽³⁷⁾」(傍点筆者)

以上、オーウェルのスペイン内戦体験における光と影、そしてその光と影がその後のオーウェルの政治思想にどのような投影されているかについて検討してきた。オーウェルがスペイン内戦において彼のユートピア的社會主義を目

撃したと同様、全体主義の原型をも体験した様に、彼のスペイン内戦体験はアンビバレントであった。しかしスペイン内戦がオーウェルの政治思想に与えた衝撃は甚大だった。彼はその後、『動物農場』、『一九八四年』を執筆し、全体主義の到来に警告を発し、それと戦った。こうしたオーウェルの行動を根底から支えていたものは、彼の悲観主義的な未来の予測とは裏腹に、人間の品位——つまり自由・平等・博愛——に対する彼の強い信仰であった。まさにこの意味においてオーウェルは、古き良き時代の遺産を受けつぐ人道主義者であり、自由主義者であった。彼のアナキズム的社会主義の概念もこの遺産を継承したものであった。

オーウェルにとって西洋文明の衰退、彼の言葉を用いれば「自由主義的キリスト教的文化の解体⁽³⁸⁾」とは、とりもなおさず人間の自由や品位(dignity)の抹殺以外の何物でもなかった。そして自由主義的キリスト教的文化の胎内から生じてきた機械文明や科学の進展は、皮肉にも戦争を大規模化したり、権力的手段として人間の品位を掘り崩す役割を果たしたりしたのである。オーウェルは機械文明を不可避なものとして受け入れつつも、なお機械文明に対する嫌悪の情を隠さなかった。彼が『一九八四年』を書いたのが孤島のジェラ島であったことは極めて示唆的であり、また『一九八四年』に登場する、国民を昼夜監視する近代的機械テレスクリーンは、オーウェルの機械文明に対する懷疑を如実に示している。全体主義は、「自由主義的キリスト教文化」をトータルに否定しつつも、その胎内から産み落された機械文明を味方につけ、人類史上稀にみる強力な独裁国家を築き上げたのである。

私達はこの論稿を、B・クリックのオーウェル論で締めくくりにすることにする。その評価は、オーウェルの本質に迫るものである。

「彼は権力亡者⁽³⁹⁾を憎んだ。知性と独立心を働かせ、私達に再び美しさと明晰さを保ちながら言葉を使うことを教

えた。友愛を求め、それを実践した。人間に共通する品位と寛客と人間性とを信頼した⁽³⁹⁾」

付記 本稿はもともと両大戦間期研究会の共同研究——テーマは、「スペイン内戦と知識人」——の一環として執筆したものであり、当初はA・マルローやE・ヘミングウェイなどについての諸論稿と一緒に掲載する予定であった。しかし諸般の事情のため共同研究が困難になったので、ここに独立した論文として掲載することにする。「スペイン内戦と知識人」についての共同研究の成果は、来年完成する予定である。

(註)

- (1) F・P・ベンソン『武器をとる作家たち』一六頁(大西洋三訳、紀伊国屋書店、一九七一年)
- (2) 前掲書 三〇頁
- (3) G・オールウェル「シリル・コナリーへの手紙」一九三七年六月六日、『オールウェル著作集I』、平凡社)に所収、二四八頁
- (4) G・オールウェル「書評」一九三七年一〇月九日、『オールウェル著作集I』に所収、二六六頁
- (5) George Orwell, *Homage to Catalonia*, penguin books, p.220. 邦訳は高島文夫訳『カタロニア讃歌』(角川文庫)を参照した。三二六—七頁
- (6) *Ibid.*, p.8—9 邦訳九—一〇頁
- (7) *Ibid.*, p.28—29. 邦訳四—五頁
- (8) George Orwell, *The Road to Wigan Pier*, 1936, p214, 229.
- (9) A・ツヴァードリンク著『オールウェルと社会主義』都留信夫、岡本昌雄訳(ありえず書房、一九八二年)一〇七—八頁
- (10) G・オールウェル「ハンフリ・ハウスへの手紙」一九四〇年四月一日、『著作集I』所収、四九九頁
- (11) この点に関し、ウッドコックは以下の様に述べている。

「社会主義とは実際にどのようなものでなければならぬのか、ということについての彼の考えをめぐる話し合いの中で、彼が結論的に出す考えは非常に簡単なものであった。彼がおもに関心をもっていたのは、真の人間らしさ (decency) という言葉に彼が集約した、かなり漠然とした内容のものであった。……「彼は」具体的な社会計画を樹るとか、党の綱領を明確に規定するとかいった方法で計画を進めていくことには性格的には気が進まなかったようである。」

G・ウッドロック著『オーウェルの全体像——水晶の精神』奥山康治訳（晶文社、一九七二年）四一頁

- (12) R. Hoggart, "George Orwell and the Road to Wigan Pier" in: *Speaking to Each Other* VII, 1970, p. 127—128.
- (13) G・オーウェル「書評」一九四八年五月九日、『著作集IV』四二二頁
- (14) George Orwell, *Homage to Catalonia*, p. 7. 邦訳八頁
- (15) George Orwell, "Looking back on the Spanish War" in: *Homage to Catalonia*, p. 243, 245. 邦訳「スペイン回顧」『著作集II』所収、二五〇—二五二頁
- (16) *Ibid.*, p. 247. 邦訳二五三頁
- (17) オーウェルは、イタリア人兵士以外にも感動的な体験として、一人のファシストのことやバルセロナの少年のことを挙げている。*Ibid.*, p. 230—233. 邦訳二四〇—二四二頁
- (18) George Orwell, *Homage to Catalonia*, p. 152. 邦訳一〇二頁
- (19) この点に関して次のウッドロックの叙述を参照のこと。
- 「彼の社会主義というのは、自由と正義というものを中心にできている。……彼は社会主義はすでにあるものの上に建設されなければならない、と考える。伝統は拒否されるべきではなく、利用されるべきものであり、いままで人々の役に立ってきた倫理体系は、それに代わる、よりよいものがくるまでは棄てざるべきではないというのだ」ウッドロック著『オーウェルの全体像』二八一頁
- (20) George Orwell, *Homage to Catalonia*, p. 107. 邦訳一五九—一六二頁
- (21) *Ibid.*, p. 107. 邦訳一六〇頁
- (22) ジョージ・オーウェル「シェフリ・ゴフラーへの手紙」一九三七年八月一六日、『著作集I』二五九—二六〇頁
- (23) George Orwell, "Spilling the Spanish Beans" in: *Select Essays from George Orwell*, p. 57.

- 邦訳「スペインの内幕をあばく」一九三七年、『著作集Ⅰ』二四九頁
- (24) George Orwell, "Looking back on the spanish war", p.235. 邦訳『著作集Ⅰ』二四五頁
- (25) P・ルイス『ジョージ・オールウェル——一九八四年への道』筒井・岡本訳、平凡社、一九八三年、八二頁
- (26) George Orwell, "Why I write" in: collected essays' p.440. 邦訳「なぜ私は書くのか」『著作集Ⅰ』七—八頁
- (27) George Orwell, Homage to Catalonia, p.61. 邦訳八九頁
- (28) G・ウッドコック、『オールウェルの全体像——水晶の精神』六八頁
- (29) 同書、二九一頁
- (30) George Orwell, "Inside the Whale" in: Collected essays, p.157. 邦訳「鯨の腹の中で」『著作集Ⅰ』四九三頁
- (31) George Orwell, "Looking back on the spanish War", p.36—37. 邦訳『著作集Ⅱ』二四六頁
- (32) G・オールウェル「悲観主義の限界」『著作集Ⅰ』五〇一頁
- (33) オールウェルは全体主義について次の様に述べている。
- 「全体主義は、以前のいかなる時代においても前例のないほど思想の自由を廃止しております。そしてその思想の統制が、単に消極的であるばかりではなく、積極的でもある事実を理解することが大切です。それは、人々がある思想を表現することを——いや考えることさえ——禁じるばかりでなく、何を考えるべきかを命じ、彼らに向けてあるイデオロギーを作り出し、行動の規範を設定すると同時に、その感情生活をも支配しようと致します。」
- 「文学と全体主義」一九四一年、『著作集Ⅱ』一三〇頁
- (34) 奥山康治著『ジョージ・オールウェル』早稲田大学出版部、一九八三年、一二八頁
- (35) George Orwell, "Inside the Whale" p.150. 邦訳 四八六頁
- (36) Ibia, p.151. 邦訳四八六頁
- (37) G・オールウェル「フランス・A・ヘンソンへの手紙」一九四九年六月一六日『著作集Ⅳ』四八五頁
- (38) George Orwell "Inside the Whale" p.157. 邦訳『著作集Ⅰ』四九三頁
- (39) B・クリック『ジョージ・オールウェル下』一九八三年、岩波書店、三五八頁